

1) 4月の例会の報告 (1982.4.2)

① 野上道男(都立大)・平川一臣(山梨大)

「4リ南部の氷河地形」

② 岩田修二(都立大)・吉田栄夫・森脇喜一・藤井理行(極地研)

「南極セルロングネ山地周辺の地形」

(要旨)

① 4リ南部($41^{\circ}-41^{\circ}30'S$)のアンデス山脈西麓で山麓氷河のつくモレーン群の編年を行い、6回の氷河前進期を明らかにした。モレーン区分、編年にあたり、豊富なテフラと、大砂流などの火山噴出物、古土壌+Feを鍍層として利用した。古い3つの氷期を除くと、最も氷河の拡大した *Languishue Maximum* は、5千年B.P. 以前の最終氷期の前半にあたり、海面の最大低下期に先行することが明らかになった。これらの知見は最近のPorter(1982)の研究結果と書きかえるもので、採取してきた年代の資料が得られると議論はさらに確実になるであろう。

また、調査隊の訪れたパイネ山群の見事な氷河地形のスライドも紹介された。

参考文献: Porter(1982)

② 1982年度から5年間、継続して調査が行われる予定になっているセルロングネ山地の空中写真(斜め写真)を撮影していただいた森脇さんにより、多数のスライドが紹介された。

セルロングネ山地は南極氷床の流動を食い止めるような役割を果たしており、山地には局地的なカール氷河も多い。著しい氷食を受けた急峻な岩峰が互いにmonumented upland状の地形も発達している。

今後、この広大な地域の地形学的研究を押し進めるためには、我々も積極的にこのプロジェクトに関わっていくことが必要であろう。

このことに関連して岩田さんより日本地理学会の研究グループとして「極地地形研究グループ」を発足させたいとの提案があり、今年度、学会のオファーに応じることになった。

2) 事務局からの報告

* 1982年度の事務局を筑波大学におくことになった。

(連絡先は 筑波大学地球科学系 小野有主先生)

* 昨年度から懸案になっていた研究グループについては、今年度から「極地地形研究グループ」を発足させることになった。これは寒冷地形談話会独自の研究グループをつくらず、「極地地形研究グループ」の枠の中で活動することになった。「極地地形研究グループ」の活動内容については、なお議論が必要であるが、セルロース・プロジェクトのための具体的準備のほか、極地と関連させたかたちで高山地形の研究を行うことも考えられるであろう。御意見があれば都立大・岩田さんあてに寄せらるたい。

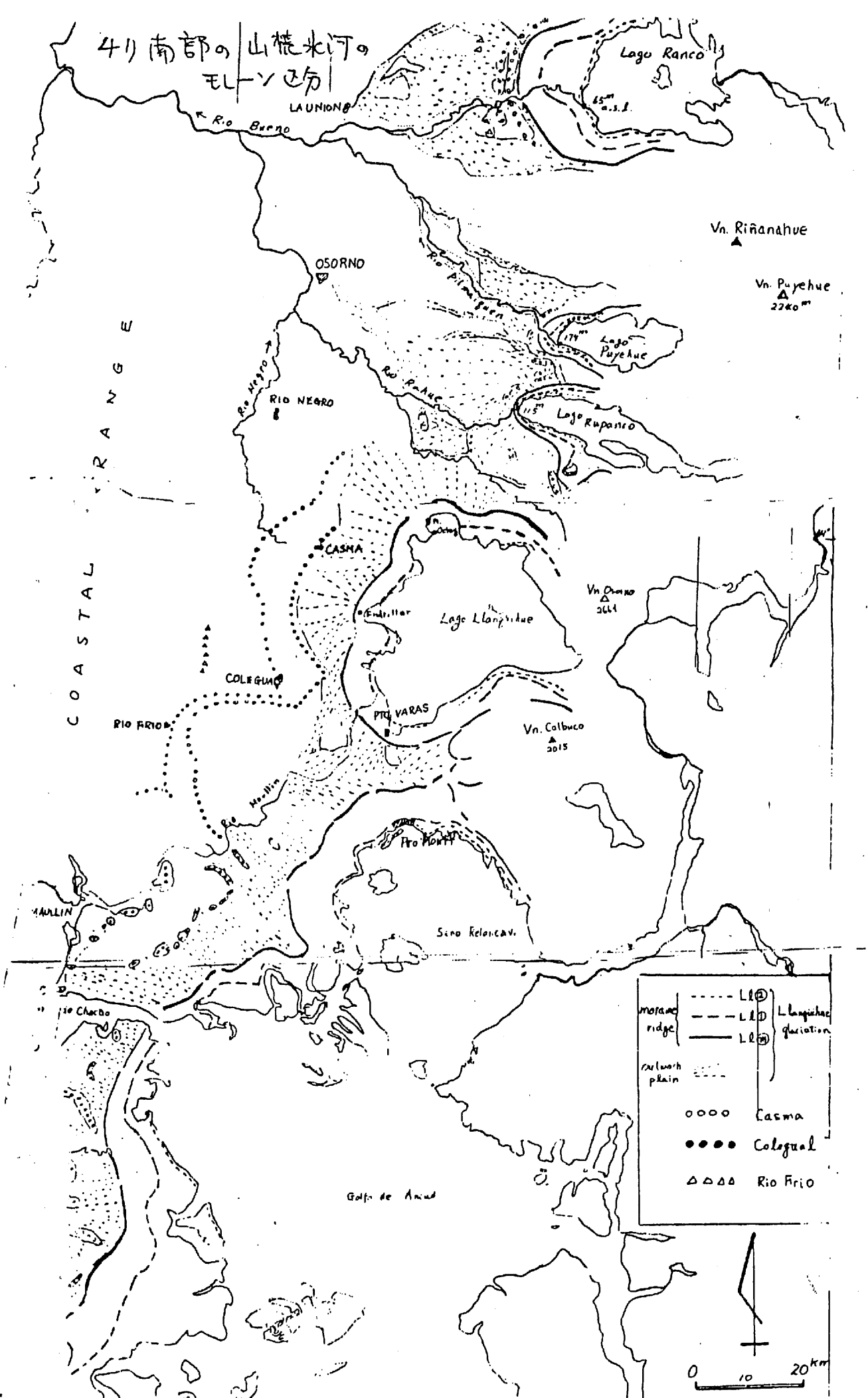
—— 5月の例会のお知らせ ——

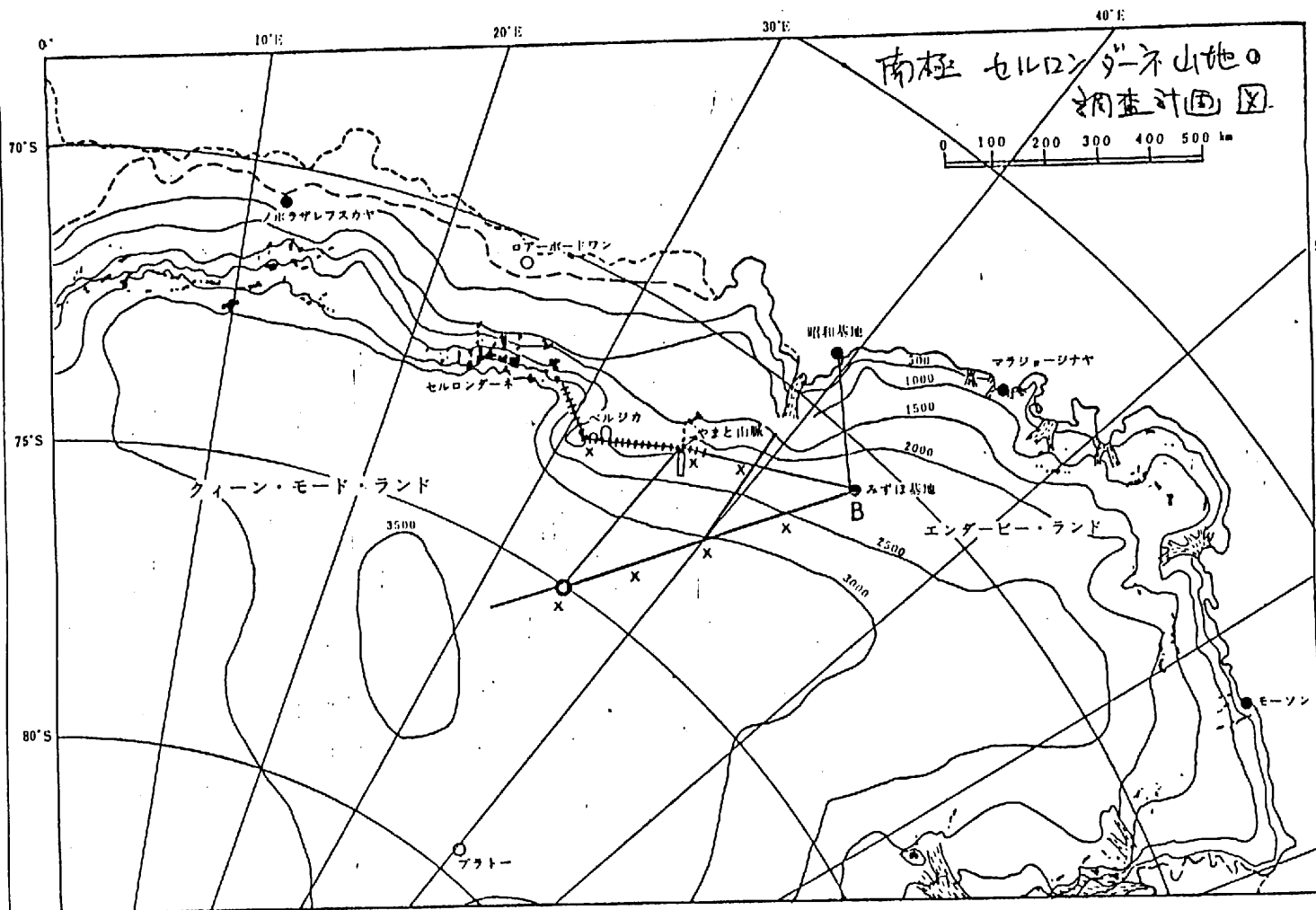
日時： 5月22日(土) 14:30-17:00

場所： 都立大学地理教室C-412(教室は当日掲示)

発表者： 田村光穂：「白馬岳 新ヶ平における植生パターンと
(学芸大院) 残雪、地形との関係」

伊藤唯司：「大井川上流部 東河内における崖錐
(筑波大院) 斜傾物質の移動について」



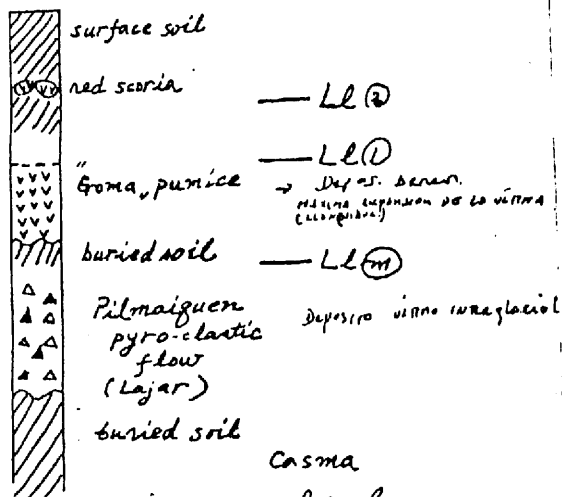


● 越冬基地 ○ 閉鎖中 ———— トラバース調査ルート ———— 2000m 等高線沿いトラバース調査ルート ———— やまと山脈流線沿い調査ルート

◎ 陸地調査地点 ○ 氷山調査地点 × 浅層調査地点

411 南部のモレーン帯年々の資料

m. Nogami ①
26. Dec. 1982



standard
columnar
section of
tephras

name of
geomorphological
surface

International correlation of glaciations

Wisconsin - Würm - Weichsel - Otiran
(Laurentide) (Alps) (Fennoscandia) - (New Zealand)

m. years (x 1000)	Europe	Rocky	Cord. Real (Bolivia)	Region de los Lagos (Chile)
0	Little Ice Age			
10	Pommern Frankfurt		milluni ③	Llanquihue ②
20	Brandenburg	Pinedale	milluni ③	Llanquihue ①
50	Paar	Bull lake	milluni ①	Llanquihue ④
100			milluni ④	Llanquihue ③
150				
200			Pata Nueva	Casma
250			Pata Antigua	Cologual

fl: 大砂流